

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 7 日現在

機関番号：14301
研究種目：基盤研究(B) (一般)
研究期間：2013～2015
課題番号：25284176
研究課題名(和文) 地中海から西・南アジア地域の人々に関わる「名誉に基づく暴力」の文化人類学的研究

研究課題名(英文) An Anthropological Approach to "Honor-based-Violence" in the Area Spanning the Mediterranean, Middle East, and South Asia

研究代表者
田中 雅一 (Masakazu, Tanaka)
京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：00188335
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,700,000円

研究成果の概要(和文)：地中海から西アジア、そして南アジア北西部にいたる地域においては、名誉と恥が社会的に重要な観念とみなされてきた。本研究では研究期間を3年とし、こうした観念と密接に関係する「名誉に基づく暴力」(honor-based violence)について地域的文脈を尊重しつつ、包括的かつ体系的に分析することを目的とする。地中海-西・南アジア帯出身者が移住先の欧米で作っているディアスポラ(移民)社会についても研究対象とする。本研究では「名誉に基づく暴力」を、伝統主義の表出としてではなく都市化、市場化、グローバル化の影響を受けた極めて現代的な現象であるという観点から、その背景と実態の把握を行う。

研究成果の概要(英文)：Honor and shame are key words to understanding the vast area spanning the Mediterranean, Middle East, and South Asia. This project aims to analyze "honor-based violence" such as honor-killing in a comprehensive and systematic way, while considering local contexts. Honor-based violence aims to restore the status of a family, whose honor is deemed to be lost by women's actions. Furthermore, honor-based violence should be considered as a modern phenomena, caused by rapid urbanization, capitalization and globalization, and not as the remains of traditional values. This is the point of view from which the background and reality of honor-based violence should be approached. This project covers not only the aforementioned area but also Europe, where many immigrants of Mediterranean, Middle Eastern or South Asian origin are found.

研究分野：人文学

キーワード：暴力 ジェンダー セクシュアリティ コミュニティ 移民 ディアスポラ 地域研究

1. 研究開始当初の背景

女性への暴力に対する意識の高まりから、過去 20 年にわたって「名誉に基づく暴力」への関心が高まっている。しかし、公刊物の多くが NGO などによる報告書で、学術書は少ない。数少ない学術的な論文集 (Welchman & Hossain eds. *Honours*, Zed Press, 2005) や単著 (Jafri *Honour Killing*, OUP, 2008) も、各地域の紹介や個別事件の紹介にとどまっただけで、より体系的かつ包括的な分析がなされているとは言い難い。国内では、中山紀子『イスラーム社会の性と俗』(アカデミア出版会、1999)、村上薫「トルコの女性労働とナムス(性的名誉)規範」(加藤博編『イスラームの性と文化』東京大学出版会、2005)、田中雅一「名誉殺人」『現代インド研究』第 2 巻(2012)などがある。上記の *Honours* には、ノルウェーでの取り組みも含まれていて、欧米での広がりの実態を垣間見ることができる。ほかに、英国の事例としてジャスピンダ・サンゲラー『恥と名誉』(阿久澤麻理子訳、解放出版社、2010)がある。

2. 研究の目的

地中海から西アジア、そして南アジア北西部にいたる地域(以下、地中海-西・南アジア帯と呼ぶ)においては、名誉と恥が社会的に重要な観念とみなされてきた。本研究では研究期間を 3 年とし、こうした観念と密接に関係する「名誉に基づく暴力」(honor-based violence)について地域的文脈を尊重しつつ、包括的かつ体系的に分析することを目的とする。「名誉に基づく暴力」の典型は名誉の殺人(honor-killing)である。地中海-西・南アジア帯出身者が移住先の欧米で作っているディアスポラ(移民)社会についても研究対象とする。本研究では「名誉に基づく暴力」を、伝統主義の表出としてではなく都市化、市場化、グローバル化の影響を受けた極めて現代的な現象であるという観点から、その背景と実態の把握を行う。また反対運動や被害者救済団体の社会実践について考察し、「名誉に基づく暴力」解決の可能性を探求する。

3. 研究の方法

主として、文献調査、調査地でのインタビュー、資料収集からなる。

4. 研究成果

以下では、大きく総論と個別の調査による成果の二つに分かれる。

(1)総論：女性への暴力における「名誉に基づく暴力」の位置。

家父長的なジェンダー規範は、生む性としての女性の管理に関わる。女性の性を管理するというのは、すべての健康な男子に妻となる女性が配分され、彼女の生む子どもが夫の子どもであるということ、すなわち嫡出子が保証されることを意味する。すなわち、社会

集団の存続を可能にする嫡出子を確保するために妻の性が管理される。そのためには結婚前から結婚の可能性のある女性全員が管理されなければならないし、男性同士の競合を最小限に抑えるために、すべての男性に女性が配分されるような結婚規制が必要となる。したがって、家父長的なジェンダー規範の中核に位置するのが結婚である。

以上の点を念頭に、文献調査に基づき、1)結婚を称揚する暴力、2)懲罰的暴力、3)規範的暴力、4)構造的暴力の 4 つが女性に対する暴力として想定できる。

1)「結婚を称揚する暴力」とは結婚に必須とする身体加工や夫婦随伴の理念に基づく女性の自己犠牲である。アフリカの FGM(女子割礼)やインドのサティ(寡婦殉死)をあげることができる。これは当事者には暴力とみなされていない。このため、これを暴力として批判、廃絶するのは困難きわまりない。

2)「懲罰的暴力」とはジェンダー規範から外れた女性を罰する暴力である。またそれが見せしめとなってジェンダー規範を強化する役割を果たす。これは、秩序を維持するための正当な暴力とみなされている。名誉に関わる暴力はここに分類される。

3)「規範的暴力」とは、日常実践におけるジェンダー秩序を維持するための暴力である。それは挨拶や言葉使い、ふるまいから、セックスチェックで胎児が女性だと判明した際の優先的中絶などさまざまである。

4)「構造的暴力」はグローバル化によって女性に負担がかかる場合、貧窮化の結果海外での移民を強いられ性暴力の被害に遭ったり、市場経済の影響が女性の商品化をさらに強めたりするような傾向を意味する。構造的暴力は、あからさまな暴力の形態をとらないが、インドにおける「持参金殺人」のようにあからさまな暴力形態を取る場合もある。また変化への反動として、ジェンダー規範の維持や結婚の称揚に関わる伝統的な暴力の強化を促す。これらは女性に対する暴力であるが、加害者には男性だけでなく女性も含まれ、同じ家父長的な価値観を共有しているという点も忘れてはならない(田中雅一：研究代表者)。

(2) 個別報告

パキスタン社会について：カラチ市において学業とスポーツの両面で近年躍進がめざましい私立の女子校を訪問しインタビューをおこなった。また、女性支援団体の会合に参加し、関係者と意見交換をおこなった。さらに、女性をめぐる諸問題に関する最新の情報を収集した。カラチでの調査から、一族の名誉を守るために女性に対してふるわれる暴力には、家父長をはじめとした家族・親族の男性だけでなく、家父長の姉妹など、身内の女性が果たす役割も軽視できないことが明らかになった。この背景には、親世代のキョウダイが子世代の arranged marriage に強

い発言権を有すること、夫婦の絆よりも異性のキョウダイ間の絆のほうが優先される傾向にあることが考えられる（小牧幸代：研究分担者）。

インド社会について：急速に市場開放が進み、経済大国化するインドであるが、いまなお、新聞では「名誉殺人」やそれに類する傷害事件がしばしば報道されている。さらに、デリーで起こった集団強姦事件のような性暴力も後を断たない。調査地のムンバイでは、主として売春に携わる女性たちから話を聞き、彼女たちの人生や職業観について調査をした。人身売買の被害者や、幼いときに寺院に捧げられた女性（devadasi）もいるが、ほとんどの場合、結婚の破綻による貧窮から故郷を離れ、売春宿で仕事を始めた女性である。彼女たちにとって売春は不名誉な活動である。しかし、その原因の多くが夫による遺棄であり、子どもの養育のために毎月故郷に送金している。ここに、家族・結婚と売春との複雑な関係が認められる。さらに、女性たちの行動から、カーストや宗教の差異を越えた関係が明らかになった（田中雅一：研究代表者）。

「アラブの春」以後の中東：チュニジア、エジプト、サウジアラビア、パハレーン、モロッコにおける「アラブの春」以前の政治的、経済的、社会的な女性の地位および各国のジェンダー政策と「アラブの春」がもたらした変化について考察した。「アラブの春」に際して女性が発揮したエイジェンシーに着目したが、エイジェンシーには、政治的・法的な地位向上を求めるもの、女性の身体に働きかけるもの（セクハラ防止のための活動）、そして「ジハード」を掲げてシリアなどの戦闘地に向かうことなど多様な方向性があることが明らかになった。また、拡大家族のネットワークと女性たちの集団的なエイジェンシーに関する現地調査をサウジアラビアにおいておこない、夫の複婚などに際して、女性が拡大家族のネットワークを通じた集団的エイジェンシーを発揮しうることが明らかになった（辻上奈美江：研究分担者）。

トルコ社会について：イスタンブールでは地方からの移住者に名誉に基づく暴力の事例の聞き取りをおこない、名誉の現象は、殺傷、殴打、支配、身体的・経済的・心理的保護、帰属感、嫉妬、愛情などの連続性のうちにとらえられることを確認した。アンカラでは家族社会政策省と女性支援 NGO を訪問し、家庭内暴力の状況と防止のための取り組みについて最新の情報を収集した。トルコは女性に対する暴力への官民の取り組みが活発だが、そのなかで名誉に基づく暴力が焦点化されることはあまりなく、「女性殺人」の一部として扱われることがわかった（村上薫：研究分担者）。

モロッコ社会について：ラバト市やタルダント県などでの調査の結果明らかになったのは、都市部においては、近隣住民のみならず、行きつけの店舗の従業員、道端にいる門番、煙草売り、露天商をはじめとした人々による面識のある女性の行動へのそれとない注視がおこなわれており、女性が規範に反する行動を取ったと見なした場合の家長への通告が、家族によるその女性（娘など）に対する行動規制や制裁を発動させる可能性につながるということである。こうした点は、名誉に基づく「暴力」の発動が、必ずしも当事者と深い人間関係を結んでいるわけでもない人々からなる監視／環視と密告の「ネットワーク」に基づくものであること、その「ネットワーク」は当時者たる女性には不可視のものであることを示唆する（齋藤剛：研究分担者）。

エジプトについての関連資料の分析：2000年代エジプトの、イスラーム法に基づく法律相談電話を資料として、名誉と暴力に関する事例を洗い出した。その結果、名誉にかかる性的な醜聞が即暴力につながるのではなく、醜聞が共同体内に露見して初めて暴力が発生すること、つまり共同体への醜聞の露見というプロセスが、名誉と暴力には不可欠なことが明らかになった（嶺崎寛子：研究分担者）。

エジプト西部砂漠およびシリア、ラッカ近郊の人々：カイロおよびバイルート、ロンドンでエジプト西部砂漠およびシリア、ラッカ近郊の地域から避難してきた人々について調査をおこなった。出身地での血鬻や名誉殺人など名誉に基づく暴力の事例聞き取りの他、彼ら自身が近年に経験したより大規模な暴力が彼らの名誉観とどのように関わったかにも注目した。その他、カイロ、バイルートではイエズス会系の NGO を介して、またロンドンでは各種ムスリム団体を通して面談の機会を得た多様な人々についても名誉に基づく暴力の経験について聞き取りをおこない、また現地メディアからの事例収集などをおこなった。これらの調査成果を加味してこれまでの収集事例を整理し、暴力の行使が名誉によって正当化されるだけでなく、暴力の抑止と和解もまた名誉のイデオロギでもって語られることを明らかにし、暴力の行使にのみ偏らないより大きな枠組みから名誉に「関わる」暴力の研究を行うべきであるとの結論を導いた（赤堀雅幸：研究分担者）。

ドイツのトルコ人社会について：ベルリンのトルコ系移民女性の交流団体および移民女性支援の NGO を訪問し調査をおこなった。ノイケルン区をはじめ移民が多い地区では、自治体が NGO と提携して移民女性への暴力問題と取り組んでいること、トルコとは対照的に名誉に基づく暴力が女性に対する暴力の

中心的現象としてとらえられていることが明らかとなった(村上薫:研究分担者)

ノルウェーのパキスタン人社会について:オスロ大学の教員らの協力とパキスタン系移民支援組織の紹介を通じて、移民女性支援セミナーに参加し、移民の子育て事情を把握するとともに、移民集住地区の視察をおこなった。また、オスロ所在のパキスタン系移民の3つのモスクや「ノルウェー・イスラム協議会」で調査をおこなった。その結果、ノルウェーでは近年、パキスタン系移民がパキスタン出身者とarranged marriageをするケースをforced marriageとして暴力視するようになってきたこと、子どもの人格を尊重し恋愛や結婚に際しても自由を認めるよう若い母親を教育する取り組みが積極的になされていることなどが明らかとなった(小牧幸代:研究分担者)

英国のイスラーム社会について:パキスタンをルーツとしイギリスに本部を置くアフマディーヤ教団の年次総会(女性の部)に参加し、さらに、教団関係の資料を幅広く収集するとともに、女性たちの移住ネットワークや、結婚の意思決定のプロセスと結婚に伴う国際移動の流れ、教団内の縁談支援機関とその役割などについて調査をおこなった。その結果、ジェンダー化した、結婚に伴う国際移動が教団内で広くおこなわれていること、そのためのシステムが構築されていること、その中には異国に嫁ぐことに伴う夫婦間の摩擦を最小限にするための調停システムがあることが明らかになった(嶺崎寛子:研究分担者)

ギリシャについて:アテネ近郊および中部のカルディッツアとソファデスのロマ(Roma)の居住地で現地調査を行い、ロマの日常生活のなかでいかに女性の処女性が家の名誉として語られ、異なる集団間の交渉に用いられているのかについて考察し、ロマのジェンダー規範と婚姻形態の現状を明らかにした。その結果、婚姻の際に女性の処女性が重視されること、またそれは父親の名誉であるとともに嫁ぎ先の名誉とされ、家の名誉と互換性をもつ概念であること、また女性の処女性が傷つけられた場合、家同士の抗争に発展しうることがわかった。また、女性の処女性をめぐる家同士の抗争はギリシャ社会でも共通して確認された(岩谷彩子:研究分担者)

ウズベキスタン社会について:名誉をめぐる暴力に関して、現代において確認できる暴力の種類の特定、名誉殺人がおこなわれなくなった原因の探求をおこなった。また、名誉殺人とイスラーム法廷における死刑の歴史をアラビア文字チャガタイ語の歴史資料やロシア語の公文書などを素材として調査・研究した。加えて、性的に不道徳な行為をおこ

なった男女とその家族にも新たにインタビューをおこなった。ここから、第1に、中央アジアにおいて名誉殺人が歴史的になされていたことは間違いがないが、それは主として遊牧民の間で婚資をめぐるトラブルを理由として起こっていたということ、第2に、定住民の間で名誉殺人が頻繁に起きたのは、ソヴィエト初期の1920年代に共産党主導でなされた女性解放運動に際して、女性がパランジ(頭頂部から足首までを覆う宗教的着衣)を脱いだことが原因だったこと(ただし加害者が近親かどうかは不明)、第3に、独立後のウズベキスタンでは、性的規範を犯す女性が増加したと言われるが、彼女たちにとって暴力からの回避方法は「結婚」しかないことを明らかにした(和崎聖日:研究協力者)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計12件)

村上薫、日常のなかの名誉 トルコ・イスタンブールの事例から、アジ研ワールド・トレンド、査読有、247、2016、49-55

村上薫、トルコの名誉殺人、アジ研ワールド・トレンド、査読有、233、2015、46-52

AKAHORI, Masayuki、Towards a Dynamic View of Saint Veneration in Islam: An Anthropology Approach, Kyoto Bulletin of Islamic Areas Studies (イスラーム世界研究)、査読有、8、2015、58-68

MURAKAMI, Kaoru、Moral Language and the Politics of Politics of Need Interpretation: The Urban Poor and Social Assistance in Turkey、査読有、15(2) 2014、181-194

村上薫、トルコにおける市民概念の再編と都市品構想の統治 公的扶助の実践に見る市民性への重層的包摂、アジア経済、査読有、55(2) 2014、36-61

齋藤剛、聖者、精霊、女性 モロッコにおける廟参詣の一断面、季刊民族学、査読無、149、2014、54-61

辻上奈美江、サウジアラビアにおける高等教育の拡大と女性の将来、中東協力センターニュース、査読無、2014年2/3月号、2014、80-85

赤堀雅幸、グローバル・イスラームと地域研究、地域研究、査読有、14-1、2014、122-137

田中雅一、多宗教世界インド怪談 暴力と姦通と名誉殺人、オンラインジャーナル SYNODOS、査読無、2014.01.29.Wed、2014、1-4

AKAHORI, Masayuki、Islamic Saints and the Islam of Saints: A Study of Popular Religion、The Journal of Sophia Asian Studies、査読有、31、2014、3-16

田中雅一、現代インドにおける女性に対する暴力 デリーにおける集団強姦事件の背

景を探る、オンラインジャーナル SYNODOS、
査読無、2013.05.08 . Wed、2013、1-2

村上薫、トルコの都市貧困女性と結婚・扶
養・愛情 ナームス(性的名誉)再考の手が
かりとして、アジア経済、査読有、54(3)
2013、28-47

[学会発表](計21件)

TSUJIGAMI, Namie、Gender Relations after
WW and Comparison between Saudi Arabia、
Lund University(招待講演)2016年2月
23日、Lund University、Lund(Sweden)

田中雅一、インド・ムンバイの売春街にお
けるジェンダー、宗教、カースト、科学研
究科 研究費助成事業基盤(B)「地中海から
西・南アジア地域の人々に関わる「名誉に
基づく暴力」の文化人類学的研究」研究会
名誉・暴力・ジェンダー 中央アジア、イ
ンド、中東からの視点、2015年12月12日、
京都大学東京オフィス(東京都品川区)

辻上奈美江、ISと女性の表象、同上

TSUJIGAMI, Namie、Establishment of A
Women's University and Changing
Aspiration of Women in Saudi Arabia、Gulf
Research Meeting 2015(国際会議)2015年
8月25日、University of Cambridge(UK)

辻上奈美江、結婚、戦闘そして暴力、混迷
するシリア・イラク情勢下の女性と子ども
たち(招待講演)2015年7月22日、上智大学
(東京都千代田区)

田中雅一、名誉に基づく暴力 趣旨説明、
日本文化人類学会第49回研究大会、2015年
5月31日、大阪国際交流センター(大阪市天
王寺区)

岩谷彩子、交渉される名誉(timi) ギリ
シャのロマ社会における貞操とコンフリク
ト、同上

嶺崎寛子、「名誉と暴力」現象における「醜
聞の露見」の意味 エジプトの宗教言説を事
例として、同上

村上薫、トルコにおけるナームスの暴力
支配、保護、帰属の連続性をめぐって、同上

赤堀雅幸、エジプト西武砂漠のベドウィン
にみる血讐と名誉殺人 名誉に基づく暴力
の行使・抑止・和解、同上

辻上奈美江、ヴェールとキャリア サウジ
アラビアの事例から、イスラームと価値の多
様性:ジェンダーの視点から研究会主催公開
シンポジウム イスラーム・女性・ジェン
ダー:価値の多様性とダイナミズム、2015年3
月28日、明治大学(東京都千代田区)

村上薫、名誉殺人を考える、同上

田中雅一、暴力とセックスから他者を考え
る、人類社会の進化的基盤研究(3)2015
年2月14日、東京外国語大学アジア・ア
フリカ言語文化研究所(東京都府中市)

辻上奈美江、「アラブの春」による身体
の管理と表象、そして女性のエージェンシー、
国際政治学会2014年度研究大会、2014年11
月15日、福岡国際会議場(福岡県福岡市)

辻上奈美江、「アラブの春」における名誉
と暴力、「名誉に基づく暴力」研究会(代表
者 田中雅一)2014年10月11日、京都大
学人文科学研究所(京都府京都市)

齋藤剛、名誉、噂、衆人環視 モロッコの
ベルベル人と名誉に関わる語り、同上

TSUJIGAMI, Namie、Social Dynamism of
Changing Women's Roles in the Gulf、Third
Symposium of Sultan Qaboos Academic Chairs
(招待講演)2014年10月3日、東京大学(東
京都文京区)

嶺崎寛子、「名誉に基づく暴力」研究会(代
表者 田中雅一)2014年6月14日、京都大
学人文科学研究所(京都府京都市)

赤堀雅幸、エジプト西武砂漠におけるサル
ル(血讐)をめぐる名誉と恥の語り、同上

嶺崎寛子、エジプト女性の宗教実践にみる
「自己承認」宗教学会第72回学術大会、2013
年9月7日、國學院大学(東京都渋谷区)

② MURAKAMI, Kaoru、Changing Meaning of
Protecting Women and Reconfiguration of
Sense of Belonging among the Urban Poor in
Turkey、World Congress of the IUAES、2013
年8月9日、University of Manchester(U.K.)

[図書](計13件)

村上薫編、村上薫、日本貿易振興機構アジ
ア経済研究所、中東イスラーム諸国における
生殖医療と家族、2016、64(55-65「トルコ
における生殖技術 規制と実践の現状」担当)

村上薫編、日本貿易振興機構アジア経済研
究所、中東イスラーム諸国における生殖医療
と家族、2016、64

福田宏、柳澤雅之編、村上薫、京都大学地
球研究情報統合センター、せめぎあうまなざ
し 相関する地域を読み解く(CIAS
Discussion Paper No.56)2016、51(37-38
「コメント」担当)

塩尻和子編、辻上奈美江、明石書店、変革
期のイスラーム社会の宗教と紛争、2015、416
(117-130「テロリズムとジェンダー 「イ
スラーム国」の出現と女性の役割」担当)

嶺崎寛子、昭和堂、イスラーム復興とジェ
ンダー 現代エジプト社会を生きる女たち、
2015、336

椎野若菜編、田中雅一、人文書院、シング
ルの人類学2 シングルのつなぐ縁、2014、
280(187-205「シングルを否定し、肯定する
日本のセックスワークにおける顧客と恋
人との関係をめぐって」担当)

椎野若菜編、村上薫、人文書院、シング
ルの人類学2 シングルのつなぐ縁、2014、280
(127-147「愛情とお金のあいだ トルコの
都市における経済的貧困と女性の孤独」担当)

辻上奈美江、明石書店、イスラーム世界の
ジェンダー秩序、2014、196

椎野若菜編、田中雅一、人文書院、シング
ルの人類学1 境界を生きるシングルたち、
2014、282(79-99「現代インドにおける女性
に対する暴力」担当)

椎野若菜編、辻上奈美江、人文書院、シングルの人類学 1 境界を生きるシングルたち、2014、282 (127-144「結婚、ミスヤール、そしてシングル サウディアラビアにおける社会の紐帯と個の遊離」担当)

内堀基光、奥野克巳編、岩谷彩子、放送大学教育振興会、文化人類学、2014、227(90-102「文化と身体」担当)

宮本久雄、武田なほみ編、赤堀雅幸、日本基督教団出版局、信とは何か 現代における<いのち>の泉、2014、336 (163-184「イスラムにおける信仰と儀礼と共同体」担当)

松本弘編、辻上奈美江、明石書店、現代アラブを知るための56章、2013、328 (224-227「アラブ世界のジェンダー」担当)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 雅一 (TANAKA, Masakazu)
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：00188335

(2) 研究分担者

村上 薫 (MURAKAMI, Kaoru)
独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・地域研究センター中東研究グループ・研究員
研究者番号：00466062

赤堀 雅幸 (AKAHORI, Masayuki)
上智大学・総合グローバル学部・教授
研究者番号：20270530

小牧 幸代 (KOMAKI, Sachiyo)
高崎経済大学・地域政策学部・教授
研究者番号：20303901

辻上 奈美江 (TSUJIGAMI, Namie)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号：30584031

齋藤 剛 (SAITO, Tsuyoshi)
神戸大学・大学院国際文化学研究科・准教授
研究者番号：90508912

岩谷 彩子 (IWATANI, Ayako)
広島大学・社会科学研究科・准教授
研究者番号：90469205

嶺崎 寛子 (MINESAKI, Hiroko)
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：50632775

(3) 連携研究者

なし